

オルヴィエート大聖堂サン・ブリツィオ礼拝堂装飾事業 1447-1504

—ピッコローミニ家とモナルデスキ家の市政と事業への関与をめぐる政治的背景—

森結（九州大学、福岡県文化振興課）

オルヴィエート大聖堂サン・ブリツィオ礼拝堂は、市当局の官吏で構成された大聖堂造営局が管理し、15世紀中葉から16世紀初めにかけて複数の画家に装飾事業が委託された。本研究は事業の公的側面に着目し、オルヴィエートと教皇庁の関係から、本礼拝堂を都市政治的文脈に新たに位置づけようと試みるものである。

先行研究は、「最後の審判」連作を描き、終末思想が色濃く反映された稀少な壁画主題が採択された本礼拝堂装飾を、オルヴィエートが教皇領都市であったことから、当時のローマ教会の危機と関連させて解釈する向きと、オルヴィエートにおいて流行した疫病との関連から解釈する向きとに大きく二極化している。教皇庁との関係性から本礼拝堂を読解する中でも、ボルジア家、ファルネーゼ家、ピッコローミニ家といった歴代の教皇を輩出した名家のオルヴィエートにおける所縁がそれぞれに主張され、議論は平行線を辿っている。

本発表は、ピッコローミニ家の間接的関与という観点から本装飾事業を考察するものであるが、本装飾事業にも出資していたオルヴィエートの有力氏族、モナルデスキ家とピッコローミニ家が縁戚関係を結んでいたことに新たに注目し、この縁故がオルヴィエートを確固たる教皇領都市へと導き、そうした都市政治的文脈の中に本礼拝堂装飾事業も位置づけられることを、実際の礼拝堂装飾と関連させながら指摘する。

本発表では装飾事業を、フラ・アンジェリコ(1395-1455)に委託された第一期(1447)、ルカ・シニョレツリ(c. 1450-1523)に委託された第二期(1499-1504)、両者の間の空白の期間を中間期(1447-1499)とし、事業全体の動きについて言及したい。

中間期の1450年にオルヴィエートは正式に教皇領となった。しかし依然として街は教皇派と反教皇派に決裂したまま市民抗争が続き、モナルデスキ家も二分されていた。そのような折、1460年に教皇ピウス2世は自らの甥とモナルデスキ家の教皇派の一派チェルヴァラの子ととの婚姻を取り結び、モナルデスキ家の反教皇派の一派ヴィペラの謀反を討伐し、街の平定と教皇派の強化に一役買った。

とりわけ注目したいのは、この時討伐されたヴィペラの息子ピエラントニオは、ピウス2世により資産没収の特赦を受けた人物であり、第二期の装飾事業の委託先を大聖堂造営局が探し始めていた1480年代に大聖堂造営局に在籍し、1500年には事業に出資していたという事実である。

発表者は以前、シニョレツリが手がけた本礼拝堂腰壁装飾に、後に教皇ピウス3世となるフランチェスコ・トデスキーニ・ピッコローミニの古代趣味が、彼を主人としていた大助祭アルベリの意向によって再現されたことを明らかにした。本発表では礼拝堂全体を取り上げ、モナルデスキ家とピッコローミニ家を中核としたオルヴィエートと教皇庁の複雑な関係性が、第二期の装飾事業において教皇庁へ向けた装飾プログラムが指向された所以であることを論じる。